裏・幻想紅魔郷

悪魔と天使

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想紅魔郷この話の知られざる話（二次創作）

レミリアとフランには姉がいた。

しかしある事をきっかけに紅魔郷では話されなかった。

本当の真実…

そして次々にくる謎の訪問者。

時空が歪み話が変わる。

その話が今始まろうとしている…

目　次

本編

第１話紅き吸血鬼　ヤンデレ・スカーレット ―――― 1
第２話紅き堕天使と白き狐 ―――― 3
第３話　初めての仕事・黒き狐 ―――― 6
第４話　キノコ採りと不思議なマジシャン ―――― 11
第５話　こーりんの手伝い ―――― 17
第６話　堕天使と狐と旅人と… ―――― 21
第７話　紅魔館とヤンデレの記憶 ―――― 27
第８話レミリア恋!?月夜との再開 ―――― 34
第９話　スーパー?電脳姉妹！ ―――― 41
第１０話　魔理沙への思い ―――― 50

本編

第1話紅き吸血鬼　ヤンデレ・スカーレット

第1話紅き吸血鬼　ヤンデレ・スカーレット

ヤン「はぁー！もう絶対に許さないわ！レミリア！フラン！（怒）。もう紅魔館に戻らないわ！」

私の名前は、ヤンデレ・スカーレット。紅魔館の当主でありレミリアとフランの姉。何故、私が怒っているかと言うと…

時間は、少し前に遡る…

私は紅魔館の地下の牢屋に閉じ込められていたの。私の力や能力などが強すぎてね。そしてフランが閉じ込められたのを聞いて私はレミリアに言ったわ。「フランを何故閉じ込めたの？」ってね。そしたら「あの子の力は強すぎる。あなたよりは、弱いけど」ってレミリアは、言った。私は、そこで少し考えたの。フランを閉じ込めないで今までどうり過ごさせるために。だから私はレミリアに「紅魔館会議」をしたいといいだした。そしたらレミリアは、「いいわよ」と言って私もフランも1度牢屋から出してもらったの。そして会議をした。内容は、今後どうゆうふうに紅魔館で過ごすか？とどうしたら過ごせるかを考えたかった。レミリアの意見にフランが賛成すればフランは、牢屋にいなくてすむ。私だけが地下の牢屋で1人出いればいいと思った。しかしレミリアの意見は最悪と言っていいほど嫌なものだった。

幻想郷を支配する

私は、レミリアに聞いた。

ヤンデレ「なんで？みんな仲良く暮らすのにこの幻想郷を支配する必要ある？」

レミリア「みんな仲良くするなら幻想郷を支配して思い通りにすればいいのよ。」

私は、レミリアの頬叩いた。

ヤンデレ「あなたは、何を考えているの…。幻想郷は、支配するも

のじゃない…。」
レミリア「ッ…！お姉様なんか…いなくなっちゃえばいいんだ！」
ヤンデレ「……分かったわ。私は、この屋敷を出ていく。みんな今までありがとう。じゃあね。紅魔館は、レミリアにあげるわ。」
そして私は、屋敷から出て今に至る。
ヤンデレ「はぁ…疲れた少し休憩しましょう。」
さっきのことが頭を過ぎる。
私は、魔法の森の木の上で胸を少し痛めた。
少し下を見ると家が見えた変わった形をしており誰かが入って行くのが見えた。
ヤンデレ「あれは魔理沙ね。この森に住んでいたのね。」
ヤンデレ「今回は、魔理沙の家に泊めてもらおうかしら？」
そう考えた私は、魔理沙の家に降りた。
コンコン（ドアを叩く音）
魔理沙「誰だぜ？」
ヤンデレ「こんにちは魔理沙。」
魔理沙「ヤンデレか！久しぶりだぜ！」
ヤンデレ「えぇそうね。」
魔理沙「どうしたそんな浮かない顔して。まぁとりあえず家の中に入ってくれ」
ヤンデレ「お邪魔します。」

第2話紅き堕天使と白き狐

第2話　紅き堕天使と白き狐
魔理沙「で、どうしたんだ？」
魔理沙は、不思議そうに私に聞いてきた
ヤンデレ「実は…」
～少女お話中～
ヤンデレ「てことになってしまったの…。」
魔理沙「いつもの事だろ？またあやまればいいじゃんか。」
ヤンデレ「嫌よ！大体レミリアが悪いのよ。幻想郷を支配するなんて言うから。」
魔理沙「ちょっとまて。今、幻想郷を支配するって言ったよな？」
ヤンデレ「ええ。言ったわよ。」
魔理沙「それってもしかすると…」
ヤンデレ「いずれまたこの幻想郷が…」
魔理沙・ヤンデレ「紅く染まる！」
魔理沙「まぁ、まだ決まった訳じゃない。この話は、2人の秘密な？」
ヤンデレ「分かったわ。」
そして夜を迎えた。
リーリー（鈴虫の音）
ヤンデレ「魔理沙ありがとう。私が1人で頑張るから。」
バサッ
私は森の上で姿を変えた…
男になった。俺の名前はブラック。堕天使だ。
次の日
ブラック「美味しい！この木の実なんていうんだろう？」
ルーミア「そーなのかー。」
ブラック「はぁ？」
ルーミア「久しぶりなのかー。ヤンデレなのかー。」
ブラック「え！ルーミア何故分かった？」

ルーミア「昨日見てたのだー。」
ブラック「マジかよ。」
ルーミア「でも内緒にするよ。」
ブラック「なんでだ？」
ルーミア「かっこいいから♥」
タッタッタッ（走っいく音）
ルーミアは、そう言うと何処かへ言ってしまった。
ブラック「かっこいい…。なんか嬉しい気持ちだ。」
次元のゆがみがおきた
ブラック「なんだこれは！」
魔理沙「おーいどうした？」
すると向こうに魔理沙がいた。
ブラック「魔理沙！あれどうして？」
魔理沙「何も言わずに出ていくなよな。困るだろ。」
ブラック「…ん。お前、魔理沙じゃないな。」
俺は、すぐに距離をとった。
???「この私の変装を見破るとはなかなかだな。」
そうするとそいつの体は魔理沙から少女のような姿になった。
ブラック「誰だ？」
赤ずきん「私はブラッド赤ずきん…。よろしくね。」
そうゆうといきなり襲い掛かって来た。
ブラック「危ねぇ！何すんだよ！」
俺は、とっさに飛んで置いて正解だと思った。
赤ずきん「あなたの血が欲しいの頂戴♪」
ブラック「仕方ねぇ…。幻想「アンダーワールド」」
俺は、スペルカードを発動した。
赤ずきん「な～に今のは？」
無傷だった。
ブラック「なんでだ…。あっ。うわあああ！」
俺は飛んでいたら木に体を強くぶつけ落ちてしまった。
赤ずきん「もう終わりか～。じゃあいただきまー…」

ブラック「やばい…！」
ガキン！
その時刃物か強くぶつかったような音が鳴った。
???「大丈夫か？」
ブラック「あなたは？」
大神「俺は、電龍　大神！」
ブラック（この人もしかして…あの時の？）
大神「おっとそんな場合じゃなさそうだね。あれはなにもの？」
ブラック「ブラッド赤ずきんって言うやつ。血を求める狂者だろう。そしてスペルカードがきかないそうだ。直接の攻撃はきくそうだが？」
大神「よく知ってるね？まぁここは俺に任せて！」
ブラック「わかった。」
俺は、大神に死なないようにと小さく呟いた。
大神「今の声どこかで？」
赤ずきん「あなたがくれるの？」
大神「残念だがあなたには死を償ってもらう。」
そう言って大神は、刀を上から下へと切った。
赤ずきん「うっ！なに…何がおこったの？」
そう言うと赤ずきんは、消えてしまった
大神「ふぅ…一件落着」
ブラック（あいつは…電龍　大神…。１度戦った相手だな。）
大神「そこにいるのは分かってる。降りてきてくれないか？」
ブラック「よく分かったな。」
大神「まあね。君、名前は？」
ブラック「ヤン…ブラックだ。」
大神「ブラックね。よろしく。改めて電龍　大神だ。」
ブラック「大神か…。よろしく。」
大神「あのさ…さっきから気になってたんだけど。なんでそんなに怖がってるの？」
ブラック「俺は、巫女無理なんだよ。（ガタガタガタ）」

第3話　初めての仕事・黒き狐

第2話　初めての仕事・黒き狐

大神「大丈夫。俺は、巫女じゃない。ただの狐さ。」

ブラック「えっそうなのか？」

大神「うん。見た目がそう見えるだけだよ。」

ブラック「そうか。なんかすまないな。」

大神「いや大丈夫だから。あぁそう言えばこの近くでヤンデレ・スカーレットって言う吸血鬼知らない？」

ブラック「えーっと知らないな…（汗）」

ヤバい正体がバレたら…

大神「そうか。あのさ。君の種族と能力教えてくれない？」

ブラック「なんでですか？」

大神「いやあの～。一応友達だからさ。」

ブラック「わかった。俺はブラック、堕天使だ。能力は、無限コンテニューだ。」

大神「コンテニューってもしかして生き返れるの？」

ブラック「一応な。」

ブラック「あのさ。なんかいい仕事ない？」

大神「なんでいきなりそんなことを聞くの？」

ブラック「暇だからな。」

大神「ん～。あ！文の新聞配達は？募集してたよ。」

ブラック「あいつ幻想郷最速の天狗なのになんで募集してるのかな？」

大神「2人の方がはかどるからだろ。」

ブラック「あぁ。そうか。」

大神「じゃあ博麗神社に行こうか。」

ブラック「え？」

～博麗神社～

霊夢「あら？大神、何か忘れ物でもしたの？」

魔理沙「大神？その後ろにいるの誰だぜ？」

レミリア「あらほんとね。」
ブラック「無理無理無理無理（小声）」
霊夢「こんにちは。あなたは誰？」
と霊夢が顔を除きこむと
ブラック「わぁー！くるな！」
霊夢「何？失礼ね。」
大神「あぁこちらはブラック。魔法の森にいたんだ。」
魔理沙「魔法の森にいたのかぜ？」
大神「うん。どうやら巫女が苦手みたいで。」
霊夢「ふーん」
レミリア「よく見ると可愛いわね。」
レミリアが目をキラキラさせている。
レミリア「私はレミリア・スカーレットよ。よろしくね」
ブラック「あぁ。よろしく。レミリア・スカーレット」
どうやらまだ幻想郷を支配する気はないようだな。
魔理沙「で何しにきたんだ？」
大神「あぁ。実は仕事をしたいらしんだけど文はいるかい？」
文「あややややや。誰か呼びました？」
???「速すぎですよ。文さん。」
文「あなたが遅いんです。ほむらさん」
大神「おお。文とほむら。」
文「お呼びですか？」
大神「あぁ。バイトの人見つけたよ。」
文「それはそれは。で誰ですか？」
ブラック「俺だ。文。」
文「えっと。誰ですか？」
ブラック「あぁすまない。俺はブラックだ。」
やべぇ普通にヤンデレ・スカーレットの状態で話してた。
文「まぁとにかく働いてくれるんですね！」
ブラック「あぁ。必ず成功させるぜ。」
ほむら「しかし俺達以外にも烏天狗がいたのか。」

ブラック「俺は、堕天使なんだが。」
霊夢＆魔理沙＆レミリア＆ほむら＆文「堕天使!?」
５人が同時にびっくりした。
ブラック「あぁ。なんだよ。おかしいか？」
霊夢「堕天使なんて種族聞いたことないわ。」
ブラック「まぁな。それはまぁ今度で仕事しますか。」
文「じゃあこれ南の方に配って下さい。」
そうゆうと８０枚の新聞を渡された。
ブラック「よいしょと。じゃあ行っくるよ。」
一同「いっらっしゃい。」
～南側に到着～
ブラック「南側に来たけど森が多いな。」
ブラック「あそこに家があるな。言ってみるか。」
トントン（ドアをノックする音）
ブラック「誰かいますか？」
???「はい？えっとどちら様？」
ブラック「初めてましてブラックっていいます。」
南「こんにちは。私は南よ。よろしく。」
ブラック「よろしくお願いします。」
南「そんなにかしこまらなくてもいいのよ。」
ブラック「そうか。あぁこれ新聞だ。」
南「ありがとう。どんなニュースかな？」
南「うーんっとヤンデレ・スカーレット疾走？」
ブラック（はぁ!?何書いてんだよあの野郎！）
南「誰かしらヤンデレ・スカーレットって？」
ブラック「だ、誰だろうね？」
ブラック「俺は、そろそろ仕事に戻らなきゃ。じゃあ！」
南「頑張ってね！」
ブラック「はぁー。（ため息）なんでよりによって俺の事書くのかな？」
～数時間後～

～博麗神社～
ブラック「ふぅ…仕事終わった。」
文「お疲れ様。はいこれ。」
文は、俺に紙袋をくれた。
ブラック「これは？」
文「手伝ってくれたお礼よ。」
中身を見るとお菓子やら木の実やら色々入っていた。
ブラック「ありがとう。ありがたく食べるよ。」
文「別にいいのよ。」
大神「バイトしたけどどうだった？」
ブラック「友達が増えたかな。」
大神「誰だ？」
ブラック「えっと四季映姫さん、幽香さん、小町さん後、南さん」
大神「え？南に会ったのか？」
ブラック「うん。もしかして知り合い？」
大神「あぁ。友達だ。」
ブラック「そっか。じゃあ今日は、帰るよ。」
大神「そうか。またね。」
文「バイバイ！」
ブラック「バイバイ！」
～夜、魔法の森にて～
ブラック「はぁ～疲れた。文からもらった木の実でも食べるか。」
モグモグ
ブラック「この木の実美味しいな。」
ガサガサ！
ブラック「なんだ！……」
???「どこを見ているの？」
ブラック「しまった！後ろか！」
ザシュッ！（刀で切った音）
ブラック「うあ！なん…だ。お…前は、誰だ？」

俺は、背中を切られた。
月夜「私は月夜　桜。黒き狐よ…。」
その狐は黒く美しい狐だった。
ブラック「何故、俺を殺そうとする？」
月夜「あなたが悪いのよ。大神に近ずいているから。」
ブラック「は…ぁ？どうゆう事だ？」
月夜「分かってるのよ…。あなたはヤンデレ・スカーレットでしょ？私の大神を取らないで！」
ザシュッ
ザシュッ
ブラック「……。」
月夜「死んだわ。これで邪魔するやつは後、少し…。」
月夜は、森の奥に言った。
ブラック「はぁ～酷いな。俺を何故殺すんだよ。」
ブラック「無限コンテニューが無かったら死んでたぞ。」
俺の能力は、死んでも無限に生き返ることが出来る。
ブラック「それにしても一体何ものなんだろう？」
～次の日～
ブラック「よいしょっと」
魔理沙「ん？ブラックじゃないか！何してるんだぜ？」
ブラック「魔理沙か。今、俺は起きたんだ。」
魔理沙「そうか。なぁ一緒にキノコ採りに行かないか？」
ブラック「へ？」

第４話　キノコ採りと不思議なマジシャン

第４話　キノコ採りと不思議なマジシャン
魔理沙「遅いぜー！ブラック！」
ブラック「待ってくれ。魔理沙、速すぎるよ。」
魔理沙「キノコ採りは、楽しいからな。早くしないと日が暮れるのぜ。」
ブラック（って言ってもまだ１１時くらいだぞ。）
魔理沙「さぁキノコをいっぱい採ろう！」
～少し森を進んで～
魔理沙「よし！ここら辺にしよう。」
ブラック「ここでキノコ採りをするのか。」
回りは、草や木がたくさん生えておりいかにも魔理沙だけが知ってるキノコ採りをする場所のようだった。
魔理沙「さぁ籠いっぱいにキノコを採ろう。後でまた合流しようぜ。」
ブラック「あぁ分かった。」
「頑張ってキノコ取りますか。」
ザッザッザッ（森を歩いている音）
ブラック「これはキノキタケか。これはキラキラタケ。色々あるな～。」
俺はある程度キノコの名前を知っていた。
シュッ（何かが飛んできた音）
ブラック「うお！なんだよ！誰かそこにいるな！」
「……気配が消えた。一体なんだ？」
地面には先程飛んできたものがあった。
ブラック「なんだこれ？カード？なんか書いてあるな。」
「拝啓、ブラック様。あなたと一緒にカードゲームをしたい。人里に来てください。マジシャンより」
ブラック「カードゲームか…。キノコ採りやってからにしよう。」
～数時間後～

魔理沙「いっぱい採れたぜ！」
ブラック「俺もだ！見てくれ」
俺は、籠いっぱいのキノコを見せた。
魔理沙「凄いじゃないか！ブラック！」
ブラック（ドキッ）「そ、そうか…照れるな／／／。」
なんだこの気持ちは？
魔理沙「じゃあ帰ろうぜ！」
ブラック「あぁ。わかった。」
～魔理沙の家～
魔理沙「じゃあ早速キノコシチューでも作るか！」
ブラック「…魔理沙。あのさ俺用事あるからまた来るよ。」
魔理沙「そうなのか…。じゃあ夜になったら来てくれ。霊夢や大神も呼んで。」
ブラック「わかった。じゃあ夜になったら来るよ。じゃあね。」
魔理沙「じゃあな。」
ブラック「人里か。よし！行くぞ！」
俺は飛んで人里へ向かった。
ブラック「ここら辺だがどこだろう？」
霊夢「あれ？ブラックじゃない。」
???「ん？あぁ霊夢が言ってた人かい？」
ブラック「うっ…霊夢。」
霊夢「何？そんなに私が嫌い？」
こーりん「まあまあ霊夢。こんにちは。僕は、香霖堂の店主、森近霖之助だ。よろしく。気軽にこーりんと呼んでくれ。」
ブラック「はい。ブラックだ！よろしくな。」
こーりん「君の事は、霊夢から聞いてるよ。今度、うちで働いてみない？」
ブラック「え？いいんですか？」
こーりん「いいよ。２人の方が仕事が捗るし。」
ブラック「ありがとうございます！」
霊夢「おしゃべりはそれくらいにして何故ここにいるの？ブラッ

ク。」
ブラック「実はこのカードで人里に来いって書いてあるから来たんだ。」
霊夢「あら。私も持ってるのよ。」
ブラック「え？マジかよ。」
???「さぁ役者は揃った。イッツカードゲームだ！」
そこには仮面を付け胸のシャツにスペードのマークが書いてあるタキシードの男が立っていた。
ブラック＆霊夢＆こーりん「えっと誰ですか？」
スペード「私の名前は、マジシャン・スペード。よろしく。」
ブラック「俺達を呼んだのはお前か？」
スペード「その通り…。君達とポーカーがしたい。」
ニヤリと表情を浮かべた。
ブラック「ポーカーか…。」
霊夢「私やってもいいかしら？」
スペード「最初の挑戦者は君か。いいよ。じゃあゲームを始めよう。」
～３０分後～
霊夢「負けたーーーーー！」
スペード「弱いね～。君は。じゃあ君の記憶を貰うよ。」
そう言うとマジシャンは、瓶を霊夢に向けた。
霊夢「え？」
霊夢の頭から丸い玉が瓶の中に入った。
霊夢「……。私は誰？」
ブラック「はぁ？霊夢しっかりしろ！」
霊夢「……。」
霊夢が喋らなくなった。
ブラック「てめぇ。霊夢に何をした？」
スペード「記憶を全てもらっただけさ。この瓶は、人の記憶を吸い取ることが出来る。他にも色んな人のを取った。私は勝負を申し込みその人とポーカーをし記憶を取る。そしてその記憶は私を強くす

る効果がある。ちなみに勝負を見てわかると思うけど私はロイヤルストレートフラッシュしか出せないのだよ。イカサマは一切ない。さぁ次は誰かな？」
ブラック「……俺だ。」
スペード「君か。君の記憶も頂くよ。」
ブラック「こーりん。霊夢を頼む。」
こーりん「無理だ！その勝負をやめるんだ！」
俺はこーりんの方を向き「大丈夫だ」サインとしてウインクをした。
スペード「じゃあ５回勝負といこうか。」
ブラック「あぁ。分かった。その代わり条件がある俺が勝ったらみんなの記憶全て元に戻せ。」
スペード「わかりました。私が勝ったら君の記憶全て貰いますよ？」
ブラック「あぁ構わない。あっシャッフル俺がしてもいいか？」
スペード「いいですよ？ではスタートです。」
スペードがカードを配り終えた。
スペード「さぁどうする？」
ブラック「２枚変える。」
俺はカード２枚出した。
スペード「はい。どうぞ。」
スペード「じゃあせーのでいくよ。せーの！」
ブラック「ロイヤルストレートフラッシュ。」
スペード「２ペア…。」
ブラック「俺の勝ちだ。」
こーりん「どうゆう事だ？」
ブラック「早く続きを」
スペード「はい。」
～５０分後～
ブラック「諦めたらどうだ？５回勝負でお前は、４連敗…。どう足掻いても勝ち目なし。」
スペード「最後の勝負です。これで勝ったら私の勝ちにしてくださ

い！」
ブラック「……。いいよ。俺も鬼じゃない。最後の真剣勝負だ！」
スペードがカードを配った。
ブラック「……。」
スペード「……。いきますよ？せーの！」
スペード「ロイヤルストレートフラッシュ！」
こーりん「これはやばい！」
スペード「私の勝ちです！」
ブラック「バーカ…。ウルトラロイヤルストレートフラッシュ！」
スペード「なん・・・だと！」
ブラック「俺の勝ちだな。」
こーりん「凄いじゃないか！どうゆう事なんだい？」
スペード「教えてくれ…なぜ４回もロイヤルストレートフラッシュ。最後にウルトラロイヤルストレートフラッシュ出せたのか。そしてなぜ俺はロイヤルストレートフラッシュが出せなかったのか。」
ブラック「それはお前がよく知ってるんじゃないか？」
スペード「うぅ…。」
こーりん「一体どうゆう事だい？」
ブラック「あのカードは、欠点がある。カードを戻す時大抵の人はカードを全てそのまま返し１番上に置きまたシャッフルするだろ？俺はあえてカードの山札を借りてバラバラにカードを山札に入れた。そうすると、カードのバランスが崩れカードでロイヤルストレートフラッシュが出なくなる。しかもこいつに関しては相手を挑発して最初は勝たせる、しかし後で全部自分勝つという勝負をしてくる。嫌なやつだ。」
こーりん「なぜ君は、勝てたんだい？」
ブラック「昔から、ポーカーやりまくってたからどのカードをどう出せば勝てるか知ってたからな。」
スペード「さすがです。はい。約束通り記憶を返します。」
記憶がなくなった人の記憶が戻った。

霊夢「あれ？私は今まで何を？」
こーりん「霊夢戻ったのか！」
霊夢「あれ？こーりん私は何を？」
こーりん「よかった戻って。」
霊夢「???」
スペード「後、ブラック様これを…。」
ブラック「ブラックでいいよ。で何これは？」
スペード「スペードの1とナイフです。カードは特殊な事が起きます。ナイフは、武器です。何かの時にお使いください。」
ブラック「あぁ。ありがとう。」
スペード「また会える事を楽しみにしてますよ。」
ブラック「またポーカーやろうな！」
スペード「ええ。では！」
そうゆうと風と共にスペードは、消えた。
霊夢「ブラック。ありがとうね。」
ブラック「う、うん…。別に…。」
大神ジーッ（ブラックをジッと見ている。）
「なにか違和感がある。少しブラックを調べてみるか。（小声）」
ブラック「ん？おーい！大神！何してんだ？」
大神「いや別に。たまたま人里を歩いてただけだよ。」
ブラック「あっ！そうだ霊夢と大神。魔理沙の家に行かないか？呼ばれたんだ。」
霊夢「魔理沙が？呼んでるの？」
ブラック「あぁ。こーりんも一緒に来るか？」
こーりん「僕は店があるからいいよ。また今度にするよ。」
ブラック「そうか。じゃあ行こうか。じゃあね。こーりん！」
こーりん「うん。バイバイ。」
そう言って俺達は魔法の森へと向かった。

第５話　こーりんの手伝い

第５話　　こーりんの手伝い

ブラックと霊夢と大神は、人里から魔法の森に直行し魔理沙の家についた。

ブラック「魔理沙～。いるか～？」

魔理沙「来たか。ブラック。今、ちょうど出来たんだぜ！」

ブラック「あぁいい匂いがするな。キノコシチューか？」

魔理沙「あぁそうだぜ。とてもいい出来だぜ。入ってくれ。」

魔理沙は、そう言って俺達を家の中に入れてくれた。

ブラック＆霊夢＆大神「お邪魔しま～す。」

ブラック（最初来た時とは変わってないな。）キョロキョロ

魔理沙「ブラックは、初めてだよな。私の家に来るの。どうだ？感想聞かしてくれよ。」

ブラック「なんとゆうか…。いかにも魔法使いの家って感じだな。」

魔理沙「そりゃ魔法使いだからな。普通の人とは違う家だろうな（笑）。」

ブラック（ところどころにパチェの本があるな。）

魔理沙「じゃあキノコシチューを食べようか。」

ブラック「あぁ。食べようか。」

大神、霊夢、ブラックはそれぞれの席に座りキノコシチューを待った。

霊夢「そういえば、ブラックはどこに住んでるの？」

霊夢がおむろに聞いてきた。

ブラック「別に何処に住んでいようと俺の勝手だろ…。」

大神「ブラック。俺も知りたい。お願いだ教えてくれ。」

ブラック「…わかった。魔理沙の家のすぐ近くに家より大きな木があるだろ？その上に住んでるんだ。」

大神「木の上か。雨とか時大丈夫なのか？」

ブラック「実は木の中にある程度小さな秘密基地見たいのがあるから大丈夫なんだ。」

霊夢「へぇー…子ども見たいね。」
魔理沙「持って来たぜ！」
ドン！（机に鍋をおいた音。）
ブラック＆大神＆霊夢「うおぉぉ…美味しいそうだね。」
魔理沙「さぁ食べてくれ！」
ブラック＆大神＆霊夢「いただきます！」
俺達は、大きな鍋からシチューを取った。
魔理沙「キノコの種類が豊富だからな。一杯食べてくれよ？」
ブラック「あぁ。ちなみに何種類入ってるんだ？」
魔理沙「えーっと…15かな？」
ブラック「なんていうキノコが入ってる？」
魔理沙「まず、キノキタケ、シャンパンタケ、バグタケ
アラシタケ、カミベン、ブロリータケ、サザンタケ等だぜ。」
ブラック「毒なしだな。少し疑ってしまった…すまない。」
魔理沙「大丈夫だぜ。私はこれでもキノコの種類を何回も見分けてきたんだぜ。それくらいは大丈夫なんだぜ。
じゃあ私も食べようかな。」
大神「ん～。シャンパングラスの形してるキノコ美味しいな。
……あれ？ブラック？」
ブラックの方を見てみると何だかレミリアに似た姿の奴がうっすらと見える。
ブラック「どうした？そのキノコの名前か？そのキノコは、シャンパンタケよ。」
大神「あぁ。そうか…。」
女口調だな？誰だ？紅い髪に赤い目…？
霊夢「どうしたの？大神？」
大神「いや…なんでもない。」
ブラック「ん？あぁ多分バグタケのせいだ。食べると多少姿が変わったりするからな。間違えて俺が食べたんだ。」
大神「あぁ…。そうゆうことか。」
～30分後～

ブラック＆大神＆霊夢＆魔理沙「ごちそうさまでした！」
ブラック「魔理沙ありがとうな。今日は、ご飯作って貰って。」
魔理沙「また、よければ作るぜ。」
ブラック「ありがとうな。じゃあ明日！」
霊夢＆魔理沙＆大神「また明日ね。」
ブラック「よし。明日はこーりんの店に行くか。」
大神「……。あの姿もしかして…。」
～次の日～
ガラガラ（スライド式のドアの音）
こーりん「いらっしゃいませ～。」
ブラック「よっ。こーりん。」
こーりん「あぁ～ブラックくんかい？お店の手伝いしに来たのかい？」
ブラック「ブラックでいいよ。暇だからな。しかし色んな物が置いてあるな。」
見ると電化製品や刀、さらには魔道書まで売ってある。
こーりん「うん。最近やたらと落ちてるんだよ。パソコンとか折りたたみ式ケータイとか。」
ブラック「へぇー。この紫色した刀は？」
こーりん「どうやら謎の力がやどっているようでね。」
確かに見ると禍々しいしい雰囲気を醸し出している。
こーりん「じゃあ手伝って貰おうかな？」
ブラック「あぁ。俺は何をすればいい？」
こーりん「そうだな…。接客してもらおうかな？」
ブラック「わかった。こーりんは？」
こーりん「僕はちょっと用事があるからお店は、頼んだよ。」
ブラック「えっ。あぁわかった。」
そうゆうとこーりんは、店出て行った。
ブラック「暇だな。客も来ないし…。」
俺は、近くにあった雑誌を読み始めた。
大神「おい。ブラック。」

ブラック「なんだよ。大神。音も無く入って来んな。なにか探してんのか？」
大神「ブラックに聞きたいことがある…いや、やめよう。」
ブラック「なんだよ。言えよ。」
大神「お前もしかして……。」
ガラガラガラ！
???「おい！ここにケータイ落ちてなかったか？」
ブラック「パソコンの横にあるやつか？」
???「おお！これだよ。」
ブラック「落し物だったか。売り物だが元々お前の物だったなら持っていけ。」
???「ありがとう。じゃあな…ブラック。」
ブラック（！）「何故俺の名前を？」
そう言った時にはもうその人物は、いなかった。
ブラック「大神！追いかけるぞ！嫌な予感がする。」
大神「おい！店は？」
ブラック「えっと…。こいつに任せる。」
そうするとブラックの影から黒いブラックが出てきた。
ブラック「頼んだぞ。」
ブラック（影）（頷く）
大神「そんな能力もあるのか…。」
ブラック「行くぞ！大神！」
大神「ああ！」

第６話　堕天使と狐と旅人と…

第６話　堕天使と狐と旅人と…

～魔法の森上空～

???「おい！ロードバードもっとスピードでないのか？」

ロードバード「ムリデス。コレイジョウダストオーバーヒートシマス。」

???「仕方ねぇな。」

そう言うとケータイを取り出し「バイク」と書かれたボタンを押した。

ロードバード「バイクモード！」

ロードバードがフライモードからバイクモードに変形した。

???「よし。これなら少し早く着くだろう。」

ブロロロロロ（バイクの音）

妖精Ａ「なんなのあれ？」

妖精Ｂ「さぁなんだろね？」

～魔法の森の中心～

???「よし。おい！そこのお前！久しぶりだな…スペード！」

スペード「おやおや。これはこれはフェイトくんじゃないか。」

フェイト「俺は、お前を探してた。闘いを申し込むために。俺と勝負しろ！スペード！」

スペード「わかりました。では少し遊んであげましょう。」

フェイト「さすがだ。先手必勝！」

そう言うとケータイを傾けて５のボタンを押した。

「ガンモード！」

ケータイが銃の形に変形した。そしてフェイトは、スペード目掛けて銃を打った。

スペード「やれやれ。学習しないねぇ。」

スペードは、スペードの４のカードを持っている。カードのバリアで銃弾を防いだようだ。

フェイト「うるさい！これならどうだ！」

次に8のボタンを押した。
「ガトリングモード！」
ガンからガトリングに変わった。
フェイト「おらー！」
思いっきりガトリングをぶっぱなしている。
スペード「よっ！はっ！とう！あたらないねぇー。」
スペードは全部、銃弾を避けている。
スペード「私の番だね。」
そう言うとスペードは、スペードの6を取り出した。
スペード「チェンジタイム！」
「チェンジタイム！ソードブレイド！」
スペードの6がナイトが持っているような剣になった。
スペード「行くぞ！はっ！」
フェイト「あぶねぇ！おい！人の顔に剣を突き出すんじゃねえ！」
スペード「これはあくまで勝負…死なないから安心して？」
フェイト「くそ！ロードバード！」
ロードバード「ノッテクダサイ！」
フェイトは、バイクにのりスペードに向かって走り出した。
ブラック「やめろー！」
ドン！
ブラックは、思いっきりバイクにあたった。
ブラック「うっ！がは！」
大神「ブラック！大丈夫か！」
ブラック「大丈夫…だ。」
ブラックは、そう言うと消えてしまった。
すると大神の目の前に土管が出てきた。そこからブラックが現れた。
ブラック「俺は、死なないからな…。」
フェイト「なんだ！あいつは死んだんじゃないのか？」
フェイトは、驚いた様子だった。
スペード「ほう。これは驚いた。」

ブラック「俺は、無限にコンテニュー出来る。何度死のうが戻って来るのさ。」
フェイト「なん…だと…!?」
ブラック「フェイトと言ったな。戦いをやめろ！」
フェイト「何故だ？俺は、あいつに勝たなきゃならない！」
ブラック「まだ戦うようならば、容赦なくお前を倒す。」
フェイト「やれるもんならやってみろ！」
ブラック「大神…。手を貸せ。あいつを止めるぞ！」
大神「わかった。よし…。」
俺は、ナイフを取り出し、大神は、刀を抜いた。
ブラック「よし行くぞ！」
俺は、フェイトに切りかかった。
しかし、ヒラリとかわされた。
フェイト「お前ら武器はナイフと刀か。じゃあこっちは…。」
フェイトは、1のボタンを押した。するとケータイの形がビームソードみたいな剣になった。
フェイト「はっ！とう！」
フェイトは、俺の目の前にビームソードを振りかざしてきた。
ブラック「危ねぇ！あいつ剣も銃も使えるのか。」
俺は、空に飛んだ。すると大神の方にフェイトは、バイクで走り出した。
フェイト「おらあああああ！」
大神（！）「くっ！」
大神は、その場に立ち止まってしまっている。
ブラック「やばい！間に合わねぇ！」
ドン！
大神「うわぁぁぁ！」
大神は、フェイトのバイクのタイヤが思いっきりあたった。
すると大神の姿が透けていっている。
ブラック「大神…。まさかお前…。」
この世界では死ぬ瞬間には透けるのである。

ブラック「……。大神。」
俺は、心の底から怒りの様な憎しみの様な力が湧きだしてきた。
ブラック「フェイト……。俺は、お前を許さねぇ。絶対にな。」
フェイト「はっはっはっはっ！その大神という奴はあっけなかったな。」
ブラック「……。す。」
フェイト「なんか言ったか？」
ヤンデレ「お前を殺す！」
俺は、姿を変えヤンデレ・スカーレットになった。
フェイト「その姿は！」
スペード（！）
ヤンデレ「危険「スピア・ザ・ブレイク」！」
俺は、怒りをあらわにしてフェイトに向けて無数のグングニルと弾幕を打った。
フェイトは、とっさに行動できず弾幕とグングニルにかすった程度に当たっていた。
フェイト「う”っ！はぁ…はぁ…。ロードバード！逃げるぞ！」
ロードバード「リョウカイ！」
フェイトは、ロードバード（フライモード）にのり空へさ逃げようとした。
ヤンデレ「逃がさない！はあ！」
ヤンデレ・スカーレットは、フェイトを追いかけロードバードに弾幕を打った。
ロードバード「ウワワワワワ！」
ロードバードがバランスを崩した。
ヤンデレ「今だ！神槍「スピア・ザ・グングニル」！」
ヤンデレは、一直線にフェイト目掛けてグングニルを放った。
フェイト「危ねぇ！ははははは！当たらなかったな！」
フェイトは、笑っている。
ヤンデレ「……。」（ニヤリ）
するとフェイトの後ろにコンテニュー用の土管が。そこからなん

と大神が出て来た。電光　光の姿でフェイトを切りつけた。
大神「真剣「一刀両断」！」
フェイト「うわあああああああああああぁぁぁ！」
フェイトは、地面目掛けて落ちていく。
俺は、姿をブラックに戻しフェイトを助けた。
フェイトは気を失っている。
ブラック「ふぅ…。これでフェイトも大丈夫だろう。」
俺は、フェイトのおでこに幸福の呪文を言った。
大神も姿が戻っていた。
ブラック「スペード。フェイトを頼む。」
スペード「あぁわかったよ。君達は？」
ブラック「俺は、仕事に戻る。」
大神「俺は、南の所にでも行こうかな？」
大神は、ボロボロの姿で言った。
ブラック「じゃあな。スペード、大神。」
大神＆スペード「またな。じゃあね。」
～香霖堂～
こーりん「やぁただいま～…。あれ？ブラック黒くなった？」
ブラック（影）（横に首を振る）
ガラガラ…
こーりん「いらっしゃ…。あれ！ブラックどうしたの！服はボロボロだし。傷は、あるし。とりあえず手当をしないと。」
～１０分後～
こーりん「そんなことがあったんだね。大変だったでしょう？」

ブラック「大丈夫だ。慣れてるからな。ハハッ。」
俺は、頭と左腕に包帯を巻かれた。どうやらバイクと弾幕の性だ。
俺の弾幕は、打った後どこに飛ぶか分からない変化球並の弾幕なのだ。
こーりん「今日は、どうする？」
ブラック「こーりんの家に止めてもらってもいいか？」

こーりん「あぁ。構わないよ。」
ブラック「ありがとう。こーりん。」

第7話　紅魔館とヤンデレの記憶

～次の日～

～香霖堂～

ブラック「ん～…。よく寝た。」

ブラックは、目が覚めた。

ブラックは、起き洗面台に行き顔を洗い鏡を見た。

（この顔も見慣れたな。）

そう思い。こーりんがいる方に行く。

ブラック「おはよう。こーりん。」

こーりん「おはよう。ブラックくん。よく眠れたかい？」

ブラック「あぁ。おかげでよく寝れたよ。」

こーりん「そうか。じゃあこれ。」

こーりんは、俺に本をくれた。

ブラック「これは？」

こーりん「面白い小説さ。君にあげるよ。」

ブラック「いいのか？」

こーりん「うん。僕は読み終わったし僕の店を手伝ってくれたからね。」

ブラック「あぁ。ありがとう。じゃあ俺は帰ろうかな？」

そう言うと店に客が入って来た。魔理沙だった。

魔理沙「よう。こーりん。あれ？ブラックもいたのか？」

こーりん「あぁ。おはよう魔理沙。ブラックくんは、ここで働いてたんだよ。」

魔理沙「そうなのか。こーりんパソコンだっけ？ちょっと見せてくれないか？」

こーりん「あぁ。ちょっと待ってね。」

こーりんは、店の奥に行った。

ブラック「なあ。魔理沙。」

魔理沙「何だぜ？ブラック。」

ブラック「お前…好きな人いるか？」

魔理沙「突然な何をいい出すんだぜ!?」
魔理沙は、慌てていた。
ブラック「いや別に…。聞いてみただけだ。」
魔理沙「まぁ。好きなやつは、いることにはいるぜ。」
ブラック（！）「誰だ？」
魔理沙「霊夢だ。私のパートナーであり良き親友だぜ。」
ブラック「そうか。パートナーか。」
こーりん「はい！魔理沙持って来たよ。」
魔理沙「おぉ。ありがとう。あっそうだブラック。紅魔館に行かないか？」
ブラック「え？何故？」
魔理沙「いやーパチュリーに本を返しに行こうと思って。」
ブラックは、少し考え魔理沙に「行く。」と返事をした。
～紅魔館～
魔理沙「さぁ紅魔館に着いたぜ！」
ブラック（やはり変わらないな。外見も中も）
魔理沙「どうしたんだよ。ブラック？」
ブラック「いや、でかい建物だな～って。」
それもそのはず元々、自分と紅魔館のメンバーが住んでいた場所だから当然でかい場所なのだ。
魔理沙「まぁ中に入ろうぜ。」
ブラックと魔理沙は、紅魔館の中に入った。
～大図書館～
魔理沙「パチュリー本を返しに来たぜ！」
パチュリー「珍しいわね。魔理沙が返しに来るなんて。」
魔理沙「まぁたまには返さないと行けないからな。」
ブラック「何処にあったけな～。あの本。」
ブラックは、本棚の隙間で好きな本を探していた。
次の瞬間ナイフが刺さった。オマケに銃弾にも当たった。
ブラック「今の攻撃は、咲夜だな？もう1人は桜だろ？」
俺は、1回コンテニューしてしまった。

咲夜「あら？ブラックだったの？」
桜「ごめんなさい。侵入者かと思ったよ。」
このメイドは十六夜　桜。咲夜の妹で咲夜と違い銃使いなのだ。
ブラック「侵入者じゃねぇよ。魔理沙と一緒に来ただけだ。すまないが紅魔館内を自由に見せてもらってもいいか？」
咲夜「ええ？あぁ構わないわよ？」
ブラック「ありがとう。」
俺は、大図書館から出てすぐにレミリアの部屋に向かった。
咲夜「珍しい子ね？紅魔館みたいだなんて。」
ブラック「ここだな。レミリアの部屋。」
俺は、そっとドアを開けた。
ブラック「レミリアの部屋は、あまり変わらないな。」
部屋には、ベッドやタンス、椅子と机があるくらいだった。
ブラック「机に何かあるな。」
ブラックが机の方に行くとノートがあった。ブラックがノートを取り開いてみた。
…お姉様。早く帰ってきてほしい。私が悪かったから。もう幻想郷を支配するとか言わないから。帰ってきて欲しい…。
ブラック「……レミリア・スカーレット。ヤンデレ・スカーレットは、おそらく戻らないと思う。すまない。」
ブラックは、分かってはいた。いつかは戻らないと行けないと…。
レミリア「あら？ブラックじゃない！」
ブラック「うお！ってレミリアか。びっくりした。」
レミリア「なんで私の部屋にいるの？」
ブラック「魔理沙と一緒に来たんだ。それで暇だからこの部屋に来たんだ。」
レミリア「もしかして…ブラック私に気があるの？」
ブラック「いやいや別にそんなじゃないよ。」
レミリア「そう…」（何か悲しいな。って私、何を考えてるのよ！）
ブラック「どうした？レミリア。」
俺が顔を覗き込むと

レミリア「ななななんでもないわよ！えっと好きなように紅魔館を見るといいわ。じゃあね！」
レミリアは、顔を赤らめて部屋を出ていった。
ブラック「なんだアイツ？まぁここには用事がないから他のところに行こ…」
ドカーン！（爆発音）
突如、大図書館の方で大きな音がした。
ブラック「今の爆発は図書館な方…。魔理沙！」
俺は、即座に大図書館に向かった。
バタン！（ドアを激しく開ける音）
ブラック「魔理沙！大丈夫か？」
魔理沙「フラン～。ここで弾幕打っちゃダメだぜ。」
フラン「えー。魔理沙遊んでくれないんだもん。」
魔理沙「でもな～。あっブラック！どうした？」
ブラック「いや…無事ならいいんだ…。」
フラン…魔理沙に何してんだよ。
フラン「ブラック～！あそぼー。」
ブラック「なんでだよ。後、危ねぇからレーヴァテインしまえ。」
フラン「う～。わかった。」
ブラック「フラン、遊びたい気持ちは分かる。けどここでやると死ぬやつもいる。だから…その……地下に戻ってくれないか？」
フラン「？ブラック。なんで私が地下にいること知ってるの？」
ブラック「え！あぁそれはだな。（焦り）」
（やべぇ！迂闊に口に出てた。どうしよう。）
チラッと俺はパチュリーの方を見た。
パチュリー「フラン。私が教えたの。だからブラックは、知っているのよ。」
フラン「なんだ～。パチュリーが教えたのか。じゃあね。ブラック。」
と言ってフランは、地下に戻って行った。
魔理沙「そろそろ帰るよ。パチュリー。またな。」

パチュリー「ええ。またね。あっブラックちょっといい？」
ブラック「えっ？あぁ。魔理沙先に行っててくれ。」
魔理沙「おう。わかった。」
魔理沙は、大図書館を出た。
ブラック「で、なんだパチュリー？」
パチュリー「…久しぶりね。ヤン？」
ブラック「……きずいてたのか。」
パチュリー「貴方は、いままで何をしてたか知らないけど紅魔館に戻らないの？レミィもフランも皆悲しい気持ちよ？」
ヤンデレ「悪いが私は戻る気は無いわ。紅魔館の当主は、レミリアの者。そして今の生活の方が私は楽よ。ごめんなさい。パチュリー。」
パチュリー「そう。まぁ仕方ないわ。でも帰って来たかったらいつでも帰って来てね。」
ヤンデレ「……ええ。」
ヤンデレは、帰る気は、全くない。パチュリーに嘘をついてしまった。
～魔法の森～
魔理沙「ブラック。今日は、付き合ってくれてありがとうな。またな。」
ブラック「あぁ。またな。」
南「隙あり！」
ブラック「うお！ってなんだよ。南か。」
南「やぁブラック。今、暇～？」
ブラック「あぁ。ちょうど暇になった所だ。」
南「じゃあさ。私とデートしよう？」
ブラック「あぁ。いいよ……。今なんて？」
南「デートしよう？って言ったの。」
ブラック「はあ？何を言ってるんだ!?」
南「何？別にいいじゃないデートくらい。」
ブラック「デートって好きな人同士がやることだぞ？」

南「うん。だから私…。ブラックの事好きなの。」
ブラック「ｏｈ……。」
南「さぁデートしよう？」
ブラック「わかったよ。」
～少し時間が経ち～
南「ん～！気持ちいい。」
ブラック「あぁ。そうだな。今日は、いい天気だ。」
南「そうね～。ポカポカ陽気で気持ちいい。」
ブラック「あぁ。本当に…痛っ…。」
南「大丈夫？ブラック！」
ブラック「大丈夫だ…。少し頭が痛むだけ…。」
その瞬間ブラックの頭に電撃が走った。
ブラック「うわあああ！痛い！」
南「ブラック?!しっかりして！」
ブラックは、気を失った。

「○○○。悪いが父さんは、ある実験をしてるんだよ。」
???「知ってる。大事な実験でしょ？」
???「そう。だから○○○を実験体しなくてはならない。協力してくれるかい？」
???「うん！お父さんの実験を手伝う！」
???「本当にいいんですか？自分の娘ですよ？記憶も無くなりますし。」
???「大丈夫だ。この実験は、成功する。」

「お父さんこれでいい？」
???
「あぁ。いいぞ。○○○…じゃあ行くぞ！」
スイッチオン！
???
「きゃあああ！痛い！」
「……。娘よ。許してくれ。」
???
「きゃあああああああ！」
「スイッチを切れ。」
スイッチオフ
???
「ついに完成した。究極の生命体が！」
「やりましたね。博士。」
???
「あなたは誰？」
「私はお前の父さんだ。そしてお前の名前はヤンデレ・スカーレットだ。よろしくな。」
???
「ええ。よろしく。」
これがヤンデレ・スカーレットが誕生のきっかけだ。
その後、父は実験したが失敗作のレミリアとフランを作り出した。父は、その日から研究に明け暮れる様になり朝から晩まで研究をしていた。家族は、それをただ見るだけしか出来なかった。その後、父は新たな生命体を作ろうとしていた。（幻想転生物語～暗闇～に続く）

第８話レミリア恋!?月夜との再開

～南の家～
ブラック「うぅぅぅ。はっ！」
南「あっ！ブラック。大丈夫？」
ブラック「南…。俺は、いままで？」
南「森で急に頭を抱えて気を失ったのよ。」
ブラック「ここは？」
南「私の家よ。近くだったから運んだの。」
ブラック「ありがとう…。」
大神「礼なら俺に行ってほしいな。」
ブラック「あっ大神。どゆことだ？」
南「大神がここまで運んでくれたのよ。」
ブラック「そうか。ありがとうな。」
月夜「久しぶりだな。ブラック？」
ブラック「！お前は、俺を切った奴か。」
月夜「しかしお前は、殺したはずなのに何故生きている？」
ブラック「俺にはコンテニューの能力があるから死にたくても死ねねんだ。」
月夜「という事は不死身か。いい刀の練習台になりそうだ。」
ブラック「やめてくれ。それに不死身じゃない。大神をコンテニューさせたことによって回数制限がかかった。残り８０回コンテニューできるがな。」
月夜「そうか。無限コンテニューは、最初の内だけか。」
ブラック「あぁ。そろそろ帰ろうかな。あまり長居してたら悪いし、俺は、帰らないと…痛っ…。」
また頭痛がおきた。一瞬だが未来が見えた気がする。あの姿は大神？
大神「まだ休んでいた方がいい。そんな状態じゃ帰れないだろ？」
ブラック「いや…はぁ…帰れる…よ…はぁはぁ…。」
頭痛になりながらも帰らないと行けないと思う。

大神「……。わかった。月夜、途中まで送ってやれ。」
月夜「わかりました。ブラック、森まで送るよ。」
ブラック「すまないな…。うっ…。」
ブラックと月夜は南の家を出た。
大神「行ったか。南、偵察ご苦労。」
南「偵察って隠れて見てたわけじゃないから偵察じゃなくない？」
大神「デートと言うのもどうかと思うがな。だが重要なのはそこじゃない。ブラックの事だ。南、何かわかったか？」
南「ブラックとヤンデレ？の関係の事でしょ？ん～友達でも親友でもない。もしかしたら同一人物説かもしれない。」
大神「やっぱりか。月夜はブラックの正体は、知らなそうだし、かといって他に知っている人はいないし…。」
南「でもさ性別を変えられることなんてあるの？永琳にも聞いたけどそんな薬はないし人の構造上無理だって。」
大神「ここは、幻想郷。常識が通じない場所だ。性転換なんて普通の事だろ？」
南「そうだね。ここは、私達がいた世界じゃない。幻想郷だからね。」
大神「今後、ブラックをマークしよう。他の人にも頼んで。」
～魔法の森の入り口～
月夜「着いたよ。ブラック。」
ブラック「ありがとう。月夜。」
月夜「ブラック…いや、ヤンデレ。」
ヤンデレ「何？月夜。」
月夜「ごめんなさい。」
ヤンデレ「(？) なんの事？」
月夜「あの…殺してしまって…。」
ヤンデレ「なんだそんな事ね。いいのよ。日常茶飯事だから。」
月夜「許してくれるの？」
ヤンデレ「別に構わないわ。さすがに練習台にするのは
やめて欲しいけど。」

月夜「ありがとう。」
月夜は、笑顔を見せてくれた。
ブラック「じゃあな！」
月夜「ええ。またね。」
～魔法の森道中～
ブラック「はっ…はっ…痛っ！」
ブラックは、息切れしながら頭痛がずっと続いていた。
ブラック「少し休まないと…。」
当たりを見渡すと洞窟があった。
ブラック「……。あそこで休むか…。」
洞窟に入ると水の音が聞こえる。洞窟の奥に行くと透明感のある水があった。
ブラック「はぁ…。少し喉がかわいたな。水を飲むか。」
ブラックは、水を飲み一息ついた。
ブラック「はぁ…。頭痛は、収まったか。しかし、何故あんなに頭が痛くなったのだろう。」
ブラックが色々と考えていると
???「あら～ここに入り込むなんて珍しいお客さんね。」
と頭の上から声が聞こえた。
ブラック「誰だ！ってなんだこれ!?身動きが取れない。」
ブラックの体にはかなり強力な蜘蛛の糸が貼られていた。
アカリ「私はアカリ。蜘蛛女よ。それにしても美味しそうね。お兄さん？」
ブラック「蜘蛛女、この糸を剥がせよ！」
アカリ「あら～餌が何を言っているのかしら？」
ブラック「餌って俺を喰う気か？」
アカリ「そうよ。質問は、それだけ？じゃあ食べましょうかね？」
蜘蛛女がブラックに近ずいてくる。ブラックは、どうすることも出来ない。すると突然、俺の糸が切れた。
ブラック「うわ…っと危ねぇ。地面に叩きつ蹴られるとこだった。ありがとうな、月夜。」

俺はくるりと一回転し着地し、月夜に例を言った。
月夜「何か嫌な予感がしてね。でもそんな事を言ってる場合じゃなさそうね？」
アカリ「私の糸が簡単に切れただと…。鉄よりも硬いのに…一体何もの？」
月夜「私は月夜。闇に紛れて現れる狐よ。」
ブラック「俺は、ブラック。堕天使だ。」
アカリ「面白いふたりね。ブラック、あなたを食べるのはやめたわ。」
ブラック「そうか。じゃあ帰ろ…」
アカリ「だ・か・ら♡代わりにこの黒い狐を食べようかしら？」
アカリは、月夜を糸で縛り逆さまに吊るした。
月夜「くっ！刀に手が…。」
ブラック「お前。友達って知ってるか？」
ブラックが少し俯きながら言った。
アカリ「知ってるわよ。私にも昔友達がいたもの。」
ブラック「その友達を傷つけられたり取られたりしたらどうする？」
アカリ「今の私には関係ないわ。」
ブラック「……それが「答え」か。」
ブラックは、顔を上げた。
ヤンデレ「神槍「スピア・ザ・グングニル」」
アカリにグングニルが直撃しアカリが天井から落ちた。
ヤンデレ「はぁ～。今の私に友達は、いない。家族も…。けどブラックにはいるわ。友達が。その友達を食べようとするならこの私が許さない！」
アカリ「何…その姿…。」
アカリは、気を失った。
ヤンデレ「大丈夫？月夜。あら？」
月夜は気を失っている。
ヤンデレ「仕方ないわね。魔理沙の家に泊まらせてもらいましょ

う。」
～次の日～
ブラック「んっ…朝か。おっ頭痛が治ってる。」
ブラックは、伸びをし顔を洗う。
ブラック「は～。さっぱりした。」
魔理沙「おはよう。ブラック～。」
魔理沙は寝起きのようだ。
ブラック「おはよう…って、まっ魔理沙!?」
魔理沙は、俺に寄りかかってきた。
魔理沙「んー?あっブラック～ごめん～。」
魔理沙は、起きたばかりなのでよく見えないようだ。
ブラック「だっ大丈夫だ魔理沙!俺は、問題ない!」
魔理沙「そうか～。」
魔理沙は、顔を洗い出した。
ブラック「／／／／／／／。魔理沙～。俺はやっぱり／／／／／。」
ブラックが顔を赤く染めている。
月夜「ん?ここは?」
ブラック「おはよう。月夜。ここは魔理沙の家だ。月夜は、気絶したんだよ。俺がここまで運んだんだよ。」
月夜「あっ私、気絶したんだ…なんという不覚。すまないブラック。少し修行せねば…。」
ブラック「まぁ無事でよかった。」
～少し時間が過ぎ～
ブラック「じゃあ色々ありがとう。魔理沙。」
月夜「すみません。一晩泊まらせてもらって。」
魔理沙「いいんだぜ!別に構わないぜ!」
魔理沙は、本当に器が大きい。
ブラック「じゃあ家に帰るとするか。」
月夜「またね。ブラック。」
魔理沙「私は紅魔館に行こうかな?」
ブラック（……紅魔館に行くのか…。）

～紅魔館～
咲夜「パチュリー様。少しお聞きしたいことがあるのですが。」
パチュリー「何かしら？咲夜。」
咲夜「最近、お嬢様の様子が少し変なんですよ。たまに顔を赤くしたり、たまにボーッとしてたり何か知っていますか？」
パチュリー「いいえ。特には知らないわ。もしかしたら赤くなる事ではレミィに好きな人が出来たのかもしれないわね。」
咲夜「好きな人ですか…。失礼致します。」
咲夜は、図書館を出た。
パチュリー「咲夜？」
咲夜「お嬢様の部屋にもしかしたら…。」
咲夜「……。あった。この髪の毛は、ブラックのかしら？でもこれじゃあ証拠が足りないわ。他にもなにか…。」
咲夜は、部屋を出てレミリアの場所に向かった。
咲夜「お嬢様。」
レミリア「何かしら？咲夜。」
咲夜「少しお聞きしたいことがありまして。」
レミリア（？）
咲夜「ブラック…の事なのですが。」
レミリア「えっ!?」
レミリアは、動揺している。
咲夜（あの反応。やはり…。）
咲夜「単刀直入に聞きます。お嬢様は、ブラックの事が恋関係で好きなのですか？本当の気持ちをおきかせ下さい。」
レミリア「……ええ。好きよ。ブラックの事が／／／／／。」
レミリアは、顔を赤らめながらもゆっくりと答えた。
咲夜「そうですか。本当の気持ちなのですね。」
レミリア「咲夜…わかっているわ。吸血鬼より先に人は死ぬ。ブラックは、堕天使しかし私より先に死ぬ。」
咲夜「お嬢様…。」
～その頃ブラックは～

ブラック「へくしゅ！う～誰か俺を噂してんのかな？」

第9話　スーパー?電脳姉妹！

ブラックは、考えていた。魔理沙の事だ。
ブラック「なんで俺は魔理沙に会うと胸が苦しいんだろう。」
それは考えなくても分かる「恋」だ。しかしヤンデレもといブラックは、恋をした事がない。もちろん付き合った事もない。
ブラック「あぁ魔理沙。俺は、お前の事がｓ…」
ドカーン！バチバチバチ！
突然、俺の頭の方から爆音と電気らしき音がした。
ブラック「なんだ!?何事だ？」
ブラックが家から降りるとルーミアがいた。
ブラック「ルーミア？何があった？」
ルーミア「……だー。」
ブラック「は？なんて言った？」
ルーミア「そ……のだー。」
ブラック「ルーミア？」
ルーミア「そうじゃないのだー！」
ルーミアは、いつもの様子と違う。ルーミアの「そうなのかー」ではなく逆の言葉を言っている。
ブラック「どうなってんだ？…あれは…。」
遠くに南がいた。しかし一瞬で姿が消えた。
ブラック「あれ？どこいった？」
すると後ろから…
南「あなたは、誰ですか？」
南が俺の首元に刀を出していた。
ブラック「あ～南？これはなんの遊びかな？」
南「貴様は、やつの仲間か？」
ブラック「は？なんの話？」
南「答えろ！」
南は更に刀を近ずけた。
ブラック（キャータスケテー）

月夜「み・な・み～♪」
南「なっ！月夜、何をする？」
月夜は南に抱きついている。
月夜「だって私は南の事が好きだから。愛情表現してるんだよ。」
ブラックは、思った。
うん…「百合」だ。
南「今はそんな場合じゃ…ってどこいった！」
ブラックは、逃げた。
ブラック「ここまで来れば大丈夫だろ。」
ガサガサ！
ブラック「誰だ！新手か？南か？」
スペード「やぁブラック。こんなところで奇遇だね？」
ブラック「なんだ…スペードか。脅かすなよ…っておぉーい！お前！」
スペード「なんだい？」
ブラック「なんで全裸なの？いつものマジシャン衣装は？」
スペード「？何言ってるんだい？いつも通りじゃないか。」
スペードは、全裸だ。男のシンボルも見えている。だけど仮面は外さない。
ブラック「とりあえず俺の上着を着ろ！」
スペードは、ブラックの上着を着た。
スペード「まあまあ着心地がいい服だね。」
ブラック「そうか…。」（苦笑い）
南「見つけたぞ！貴様！」
月夜「待ってよ～南～♥」
ルーミア「そうじゃないのだー！」
一斉にブラックの方に南、月夜、ルーミアが来た。
スペード「やばいな。帰ろう…。」
スペードは、カードを残し消えた。
ブラック「やばっ！」（どうする!?）
???「こっちだ！ブラック！」

ブラックは、木の上に引っ張られた。
ブラック「ふ～助かった。ありがとうな。フェイト。」
フェイト「いや別にたまたま通りかかってからな。」
ブラック「なぁみんなおかしくないか？ルーミアは、逆の言葉が使うし南は、俺のこと知らないし月夜は、大神ではなく南を好きになるしスペードは、露出魔だし。」
フェイト「あぁみんなおかしいな。なんでこんなことになったんだろうか？」
ブラック「お前は、変わってないな。どうしてだ？」
フェイト「未来に少し帰ってたんだ。俺は、時空の旅をしてるから過去、現在、未来にも行ける。他にも異世界やこの幻想郷にも来れる。」
ブラック「なるほど。いないから影響を受けなかったと。」
フェイト「できれば過去に帰ってこの異変の犯人を調べたいのだが、過去に行く通路が何者かによって封鎖されている。」
ブラック「じゃあこの異変は、今解決しなければならないんだな？」
フェイト「あぁ。未来だとみんなが死んでいる。しかし魔理沙って女とお前のもう一個の姿がいた。しかし不思議だ。魔理沙は、何故影響を受けないのか？」
ブラック「それは分からない。でも今を変えれば最悪未来は、変わるんだよな？」
フェイト「あぁ異変の犯人を探そうぜ。俺は、バイクで走りながら探す。」
ブラック「じゃあ俺は空から見てみる。」
フェイト「あぁ頼んだぞ！」
ブラックとフェイトは、それぞれ別れて探すことに。
～魔法の森上空～
ブラック「うわあ…酷い有様だ。人や妖怪がおかしくなっている。」
チルノは頭が良くなり何かしら色んな言葉を言っている。ミスティアは、ヤツメウナギじゃなくラーメン屋をやっている（屋台で）。
ブラック「早く探さないと…！」

～妖怪の山～
ブロロロロロ！（バイクの音）
フェイト「いねぇな。にしても山は、妖怪で溢れかえってるな。」
フェイトは、その間をバイクで走り抜けながらそんな事を思っていた。
ロードバード「ハクレイジンジャニハンノウアリ！」
フェイト「おっそうか。じゃあ行くぞ！」
ロードバード「フライモード！」
フェイトは、博麗神社に向かった。
～博麗神社近くの上空～
ブラック「はぁ～博麗神社まで来ちゃった。」
ブラックが下を見ると見知らぬ女が立っていた。
ブラック「誰だ？聞いてみるか。」
ブラックが博麗神社の前に降りた。
ブラック「おい。お前そこで何してるんだ？」
???「何してるのって博麗霊夢ってやつを倒したんだけど？」
よく見るとその女の足元には、横たわっている霊夢の姿が！
ブラック「お前…何者だ？」
ナツユキ「私はナツユキ。バーチャルの世界から来たキャラクターで～す！」
人を殺したとは思えないテンションで丁寧にかつふざけた感じで挨拶をしてきた。
ナツユキ「それにしてもここの住民は、面白いね。私が設定をいじっただけであんなにも変わるんだね。」
ブラック「設定を変える？何を言ってるんだ？」
ナツユキ「そのままの意味だよ？例えばあなたが私の事を嫌いだとする。その時、私があなたの設定を変えればあなたは、私の事が好きになる。簡単に言うと性別や能力、この世界の住民のプロフィールなど変えることが出来るって感じかな？」
ブラック「みんながおかしいのはお前のせいか。」
ナツユキ「おかしい？面白くしただけよ。あなたは、この面白さが

分からないの？」
ブラック「分からねぇな。それよりこの状態を早く戻せよ。」
ナツユキ「嫌よ。面白い物はもっと面白気しなきゃ！」
ブラック「言っても分からないなら。力ずくでやめさせてやるよ。」
ナツユキ「へぇー面白い…。やれるもんならやってみなさい！」
ナツユキは、電子パネルを展開した。
ブラック「電子パネルか…。あれで設定を変えてる感じか。」
ナツユキ「イラスト！」
ナツユキは、白いパネルに何か書いている。
ブラック「とりあえずナイフを…」
ナイフを取り出そうとしたがナイフがない。
ブラック「あれ？ナイフは!?」
ナツユキ「危ないので破壊させてもらいました～。よし！完成！」
ナツユキは、書いた絵を復元させた。
ナツユキ「銃を復元させたよ。よし！君には消えてもらおう。」
ナツユキ銃を打ってきた。
ブラック「やばっ！」
ブラックは、高く飛んだ。
フェイト「ブラック！あいつは？」
ブラック「設定を書き換えたり物を復元、破壊が出来るやつらしい。」
フェイト「あいつが異変の首謀者か。それなら…」
フェイトは、携帯型の銃を取り出した。
フェイト「喰らえ！」
フェイトは、ナツユキに目掛けて銃を乱射した。
ナツユキ「わっ！あぶないな～。設定を書き換えよう！
えっと…これか！こうして…」
フェイト「え？俺の銃は？ロードバードもいねぇ！」
ブラック「あいつ消したな。でもしかしどうしたもんか。武器もないんじゃ戦えない。」
フェイト「お前さ…スペルカードあったよな？あいつにやってみて

くんねぇか？」
ブラック「無駄だと思うけどやってみるか。」
ブラック「幻想「アンダーワールド」！」
ブラックの後ろから黒い世界が出てきた。そして無数の弾幕がナツユキ目掛けて飛んでいく。
ナツユキ「消してやる！……あれ？消せない！うわあ！痛ァ！なんで？」
ブラック「あれ？攻撃が当たる。なんで？」
フェイト「やっぱりか。お前さ、本当の姿はあの吸血鬼だろ？多分だけどその姿だとあいつのデータにお前は、居ないんじゃないか？作られた存在だから。ナイフは、元々スペードのだし物体だから消せるけど。」
ブラック「作られた存在…。という事はこの姿なら戦えるって事か！よし！それなら。」
ブラックは、ナツユキ向かい新たなスペルカードを出した。
ブラック「漆黒「堕天の狂想曲」」
辺りには黒い羽が飛び交いナツユキに向け一斉に飛んできた。
ナツユキ「痛っ！う～もうなんできかないの！」
ナツユキは、必死に俺に設定を変えようとするが全くもって意味が無い。
フェイト「俺も何かできれば…あっそうだ！」
フェイトは、ナツユキに狙いを定めて…
フェイト「足に力をためて…よし！いくぞ！」
足が光だしフェイトは、ナツユキに向けて蹴りを出した。
フェイト「うおらあああああ！」
ナツユキ「え!?きゃあ！油断した…。もういい…この世界を破壊してやる～！」（泣）
ナツユキは、思い通りに行かず泣きながら恐ろしい事をいい出した。
フェイト「えっ……はぁ！やめろって！」
???＆霊夢「やめなさい！」

ナツユキ「痛っ！誰よ！私の頭叩いたの！っておねちゃん!?と博麗霊夢!?え？なんで？どうして？」
ナツユキは、突然の事で頭の整理が追いついていない。
???「もうあなたは、いつもこうなんだから。」
ナツユキ「だって～…。」
ブラック「すまないがあなたは？」
ハルアキ「ご迷惑かけて申し訳ありません。私はハルアキ。ナツユキの姉です。よろしくお願いします。」
ブラック「こちらこそよろしく！」
ナツユキ「ねぇなんで博麗霊夢は、生きてるの？」
ブラック「あ～それはだな。俺が生き返らせた。」
ナツユキ「え？それはどうゆう？」
ブラック「俺の能力は、人にも反映出来て簡単ゆうとコンテニューさせたって事だ。」
ナツユキ「あなた…色々と凄いのね。」
ブラック「まぁな。そういやなんであんたら姉妹は、ここに？」
ハルアキ「実は、私の世界が終わりを向かいそうになっていてその為どこかの世界に移住しなければならないのです。」
霊夢「じゃあここに住めばいいじゃない。」
ハルアキ「できればそうしたいのですが、私たちはパソコンの世界から来たので現実の世界にはあまり居られないんです。もしここにいたら消える場合もあるので。」
フェイト「なら…俺のケータイは？」
ハルアキ「あまり他人に迷惑は、掛けたくありません。」
するとブラックの後ろにスキマが。
ブラック「ん？紫か？何？」
紫「このパソコンに入ればいいんじゃない？」
ハルアキ「ですから人に迷惑は…。」
紫「大丈夫よ。この持ち主は怒こらないから。」
ハルアキ「はぁ…ではお言葉に甘えて。ナツユキ行くわよ。」
ナツユキ「うん。じゃーねー！みんなー！」

ハルアキ「あっ、この世界は元に戻しておきますので。では…」
ブラック「おう。じゃあな。」
フェイト「行ったか。これで時間もみんなも元に戻るだろ。」
霊夢「騒がしい連中だったわね。また来るかしら？」
ブラック（……。）
フェイト「ブラック？どうした？」
ブラック「ん？あっ…いやなんでもない。」
ブラックは、あの未来の事が気になっていた。魔理沙と自分だけがいる未来を…
霊夢「もう夕方ね。２人とも今日は、泊まっていいわよ。」
フェイト「おぉ助かる。サンキュー。」
ブラック「俺は、いいや。家、近いし。」
霊夢「あらそう…。じゃあ気をつけてね？」
ブラック「あぁ。じゃあな。」
フェイト「おう！じゃあな。」
霊夢＆フェイト「……ふぅ。」
霊夢「ねぇフェイト？ひとつ気になることがあるのだけれど。」
フェイト「俺もだ。」（まぁ知ってるがな。）
霊夢「ブラックって……。」
フェイト「……。」
霊夢「随分前にいなくなった。ヤンデレ・スカーレットじゃないかしら？」
フェイト「話は、聞いていたが有り得るな。」
霊夢「明日…大神に話そうかしら。」
フェイト「いや…俺から話しておこう。」
霊夢もフェイトもブラックの正体に気づきつつあった。
～魔法の森～
ブラック「……気づいてる…か。そろそろ限界かもしれないな。」
魔理沙「ブラック？どうした？そんな顔して。」
ブラック「うお！魔理沙！いや別になんでもないよ。」

魔理沙「気になるんだぜ。悩みなら聞くんだぜ？」
ブラック「魔理沙…。大丈夫だから…。」
ブラックは、魔理沙に心配は掛けたくない。なぜなら自分の正体を隠すためでもあるし魔理沙の事が好きだから。
魔理沙「本当に大丈夫なのか？」
ブラック「あぁ。じゃあ魔理沙、おやすみ。」
魔理沙「あっ…おう、おやすみ。」
ブラック（魔理沙、本を持っていたな、紅魔館に行ってたな。そして微かに少し笑顔が見えた。紅魔館でお話でもしたんだろう。）
徐々にブラックは、紅魔館と紅魔館の住民に嫌気がさしていた。
ブラック「魔理沙…。一緒にいたいよ。」

第１０話　魔理沙への思い

ブラック「……魔理沙…魔理沙…魔理沙。」
ブラックは、数分間ずっと呟いている。
ブラック「しかし魔理沙は、私の気持ちに気づいてない。」
口調がヤンデレ・スカーレットになっている。
ブラック「思い切って伝えよう！魔理沙に好きだって！」
ブラックは、決意した。
ブラック「魔理沙～いるか？」
魔理沙「おっブラックか！ん？何か言いたそうな顔してるな～？」
ブラック「実は魔理沙、あの…。」
魔理沙「何だぜ？」
ブラック「俺は、魔理沙…の…。」
魔理沙「？」
ブラック「俺、魔理沙の魔法を教えて欲しいんだ！」（何言ってるんだ俺！）
魔理沙「なんだそんな事か～。いいぜ。丁度暇だったから私の家で教えてやるぜ。」
ブラック「あ、あぁ。ありがとう。」
ブラックは、思いが伝えられない。何故？どうして？魔理沙に好きと言うだけなのに…。
魔理沙「で何が知りたいんだ？」
ブラック「ん？あぁえーっと。」（ヤバい考えてない。）
魔理沙「もしかして魔法がよく分からないか？」
ブラック「まぁ魔法に無縁だったもんで。」
魔理沙「じゃあ移動魔法なんてどうだ？」
ブラック「移動魔法？」
魔理沙「物体を瞬間移動させる魔法だ。こんな感じにっ！」
魔理沙が机に向かって手を向け力を入れるとそこには本が何冊か出てきた。
ブラック「おぉ。でなんでこの魔法を俺に？」

魔理沙「ブラックは、ナイフを持ってるけどしまう物がないからいつも手に持ってるだろ？それだとあぶないだろ？だから取り出せる感じでこの魔法がいいんじゃないかと思ったんだ。」
ブラック「そうか。じゃあそれにしてくれ。」
魔理沙「わかったぜ。ちょっと待ってくれ。」
魔理沙は、部屋の奥の方に行った。
ブラック（何故言わない！言えるチャンスは、あまりないんだぞ！「好き」って言う事がなぜ出来ない！）
魔理沙「よし。ブラック。私の手を握ってくれ。」
ブラック「うぇ!?なんで!?」
魔理沙「そうしないとブラックに魔法が覚えられないんだ。」
ブラック「そうか…じゃあ…」
ブラックは、そっと魔理沙の手を握った。
（魔理沙の手…柔らかい／／／／／。）
魔理沙「じゃあいくぞ！……はあ！」
ブラック「うぉ！なんだ!?」
床に魔法陣が現われ魔理沙の魔力をブラックに分けた。
魔理沙「ふぅ…完了だぜ！これでブラックは、移動魔法が使えるようになったぜ！試しにやっみてくれ。」
ブラック「あぁ。はぁ！……おぉ！手元にナイフが！」
魔理沙「これが魔法の力だぜ！凄いだろ？」
魔理沙は、自慢げに言った。
ブラック「おぉ。ありがとう、魔理沙！」
魔理沙「さて、じゃあパチュリーに本を返しに行こうかな？」
ブラック「待ってくれ！」
ブラックは、魔理沙の手を掴んだ。
魔理沙「ブラック？」
ブラック「紅魔館に行かないでくれ…。」
魔理沙「なんで？」
ブラック「それは……。」
ブラックは、紅魔館に恨みを持っている。魔理沙が紅魔館に行った

らもう会えなくなるんじゃないかと思いはじめていた。
魔理沙「……わかったぜ。今日は、家でゆっくりするぜ。」
魔理沙は、不思議に思いながらも椅子に座り読書をした。
ブラック（魔理沙…すまない。）
ブラックは、魔理沙の家をでた。
～博麗神社～
ブラック「……。」
霊夢「♪～。あら？ブラックじゃない。何か用？」
霊夢は丁度、神社の掃除をしていた。
ブラック「少し話がしたい。」
ブラックと霊夢は博麗神社に入り霊夢に話した。
ブラック「霊夢、真剣な話なんだが…。」
霊夢「うん。何かしら？」
ブラック「実は俺…魔理沙の事が好きなんだ。」
霊夢「ふーん。そうなんだ。」
ブラック「あまり驚かないんだな。」
霊夢「あたりまえよ。魔理沙が好きな人は今までもいたもの。」
ブラック「えっ誰？」
霊夢「プライバシーにかかる事だからあまり言わないけどアリスとパチュリーよ。」
ブラック「アリスってあの人形使いの？」
霊夢「そうよ。まぁ同じ魔法使いだから仲がいいのかもね？」
ブラック「霊夢は、自分と魔理沙どれくらい好きなんだ？」
霊夢「普通に好きよ。旧友達だしもしかしたら産まれる前から友達だったんじゃないかしら？」
ブラック（そこまで…。そっか俺は、今までいなかったからな。魔理沙とあって初めて友達になってそれですきになって…）
霊夢「好きと言っても友達関係でね。恋愛対象で見たことはないわ。」
ブラック「そっか。よかった話が出来て。」
霊夢「そう？ならよかったわ。困った事があれば私にいいなさい。

力になれると思うから。」
ブラック「あぁ。ありがとう。」
霊夢「ところでブラック？」
ブラック「ん？何？」
霊夢「体ガクガク震えてるけど大丈夫？」
ブラック「ごめん。霊夢…やっぱり巫女苦手だわ。」
霊夢「……じゃあ克服しましょうか！」
ブラック「ふぇ？」
霊夢「克服よ。さすがに私もこれかも怖がられるのは困るわ。だから私と後…早苗にも来てもらって私達と生活して克服してみましょうか！」
ブラック「無理無理！絶対無理！」
霊夢「拒否権はないわ。じゃあ早速始めましょうか！」